

博物館における戦争展示とその受容に関する基礎的研究

メタデータ	言語: ja 出版者: 静岡大学 公開日: 2013-01-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 金子, 淳 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10297/7012

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 3月31日現在

機関番号：13801
研究種目：若手研究（B）
研究期間：2009～2011
課題番号：21730408
研究課題名（和文） 博物館における戦争展示とその受容に関する基礎的研究
研究課題名（英文） Basic Study on the War Exhibition and its Acceptance in Museums
研究代表者
金子 淳（KANEKO, Atsushi）
静岡大学・生涯学習教育研究センター・准教授
研究者番号：00452178

研究成果の概要（和文）：

本研究では、博物館において開催される戦争展示が、どのような意図と内容を持ち、自治体および地域社会にどのような意味や影響をもたらし得るのかということについて、展示内容の意思決定に関わる学芸員の役割を射程に収めながら、具体的な事例に基づく検証を行った。その結果、さまざまな政治的アクターが関わりながら決定された戦争展示においては、その論争的性格ゆえに、来館者の理解を前提としたコミュニケーションが想定されていない現状が明らかとなり、戦争展示のメッセージの「宛先」や受け手の存在を想定したコミュニケーションを構築していくことの課題が浮き彫りになった。

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合 計
2009 年度	300,000	90,000	390,000
2010 年度	300,000	90,000	390,000
2011 年度	300,000	90,000	390,000
年度			
年度			
総 計	900,000	270,000	1,170,000

研究分野：社会学

科研費の分科・細目：コミュニケーション・情報・メディア

キーワード：博物館・展示・戦争

1. 研究開始当初の背景

これまで戦争展示に関する研究としては、博物館学（博物館研究）において対象とされることが多かったが、それらの多くは、博物館において“どのように”展示するかという技術的な問題に傾倒しており、“なぜ”その

主題が博物館で展示された／されなかったのかという技術が要請される以前の前提や、来館者にどのように理解された／されなかったのかという受容のプロセスについては議論されることが少なかった。また、戦後50年を契機として戦争展示あるいは戦争博物館の文脈で運動論的に語られることが多く

なったが、その表象と受容の問題とかかわる形で取り上げられることはきわめて少ない状況にあった。

一方、近年では、人文・社会諸科学において、博物館およびその周辺領域を対象とする研究が増えつつあり、博物館を「文化を表象する装置」としてとらえた上で、自己／他者の表象という観点から、展示空間のもつ政治性やイデオロギー性を批判的に検討しようとする取り組みも多くなっている。

本研究も、基本的にはこうした問題意識を引き継ぐものではあるが、戦争展示に関連してさらに重要なのは、表象としてだけでなく、受容のプロセスを視野に収めた総合的な観点から読み解いていくことであると考え、本研究の着想に至った。

2. 研究の目的

本研究は、博物館において開催される戦争展示が、どのような意図と内容を持ち、来館者や地域社会にどのような影響をもたらしているのかということについて、実際の博物館における戦争展示の展開事例をもとに明らかにすることを目的とし、とりわけ以下の点に留意した。

- ①戦争展示の内容が決定していくプロセスにおいて、どのような政治的アクターがどのような形で関わり、いかなる影響を及ぼすのか。
- ②博物館の専門職員である学芸員は、その意思決定のプロセスにどの程度関わっているのか。
- ③そうしたプロセスを経て具体化した戦争展示は、どのようなメッセージを持つものであり、そのメッセージをどのような手法で伝えようとしているのか。
- ④実際に、戦争展示は来館者にどのように受容され、社会における戦争観の形成に寄与しているのか。

これらの点を解明していくことにより、戦争展示の成立の一連のプロセスが明らかになり、こうした作業を通してはじめて自治体

や地域にとって戦争展示がどのような意味や機能を持っているのかを知ることができると考えた。

3. 研究の方法

戦争展示、もしくは博物館における「戦争の語り」を検討していくにあたり、まず、「負の記憶」そのものに焦点を当てて調査を進めた。博物館において負の記憶がどのように表象されているのかということについて、戦争と同様に戦後史において負の記憶の代名詞として挙げられる公害を取り上げ、博物館における「公害の語り」の現状と課題について検討した。具体的には、四日市市立博物館を対象として、公害に関する展示内容の分析、展示以外の公害表象に関する行政施策についての実態調査、公害問題を抱える他自治体での同様の事例に関する比較調査等を行い、自治体による「負の記憶」の語りの現状とその課題について検証した。

あわせて、各地の博物館における戦争展示の実態調査として、①文献調査、②現地調査、③事例研究対象館の分析を3つの柱として調査を進めた。上記①は、各博物館において発行されているガイドブック・展示図録・パンフレット・研究紀要など、各館の活動状況を把握する資料を入手したほか、先行研究に関する文献など多岐にわたる資料収集を行いつつ、研究課題全般に関する把握に努めた。また②として、静岡県内の博物館を中心に全国各地の博物館を訪問し、実際の戦争展示の現状を調査した。③においては、常設展示におけるパネルの文言をめぐって県議会を巻き込む論争へと発展した埼玉県平和資料館の事例を中心に、戦争展示が戦争観の形成に寄与し得るかどうかの検証を行い、戦争展示が持つメッセージの効果やその受容のプロセスについて考察した。

本研究においてもっとも重視していた、戦争展示のメッセージがどのように受容されるのかという課題については、ミュージアム・スタディーズにおける来館者研究やマス・コミュニケーション研究、メディア論などの動向を参照しつつ理論的考察を行う一

方で、展示内容の意思決定に関わる学芸員の役割を射程に収めながら、具体的な事例に基づく検証を行った。

4. 研究成果

(1) 「負の記憶」の展示

博物館において「負の記憶」がどのように表象されているのかについて、「公害」を例に、四日市市立博物館における「公害の語り」の現状と課題について検討した。その成果は、「公害展示という沈黙——四日市公害の記憶とその表象をめぐる」(『静岡大学生涯学習教育研究』13号、2011年)としてまとめた。

四日市で発生した四日市喘息は、いわゆる四大公害病の一つであるが、他の三地域においては、公害という負の記憶を「教訓」として語り継ぎ、「公害の忘却」に抗う場として、自治体や市民団体などがそれぞれ博物館を持ち、公害に関する展示を独自に行っている。ところが四日市においては、これらに類する施設は存在せず、四日市市立博物館にいたっては、通史展示の中で公害に関する展示はないに等しい。こうした四日市における「負の記憶」の表象をめぐる、四日市市立博物館における展示内容や公害に関する行政施策のプロセスなどについて調査した結果、四日市においては、「公害の忘却」に抗うのではなく、行政を中心にむしろ「公害の忘却」が促されるような事態を進行させていたことが明らかとなった。さらに、四日市市立博物館における公害の展示が、ある種の「公害の幕引き」をオーソライズする役目を負われ、博物館が行政による「忘却への願望」を支持・強化する装置として機能していただけでなく、博物館自らが「公害の忘却」を实践するという皮肉な役回りを演じていたことが確認された。

(2) 戦争展示のメッセージの受容

次に、戦争展示が成立するに至る一連のプロセスや「戦争の語り」の内実を明らかにするため、埼玉県平和資料館における「従軍慰安婦」の修正問題を事例として、戦争展示が戦争観の形成に寄与し得るかどうかの検証

を行い、戦争展示が持つメッセージの効果や受容のプロセスについて考察した。その成果は、「戦争観の形成と戦争展示——「熱い論争」と「冷やかな無関心」という落差をめぐる」(『静岡大学生涯学習教育研究』14号、2012年)としてまとめた。

埼玉県平和資料館の「従軍慰安婦」修正問題とは、2006年、埼玉県議会において、常設展示の年表パネルに「従軍慰安婦」と記載されていることに対し、知事が「東西古今慰安婦^(ママ)はいても従軍慰安婦はいません。(中略)こういった間違った記述がありますので、こういうのは修正しなければならん」と発言したことが発端となって巻き起こった論争のことであるが、県議会の議事録をはじめ、抗議行動の経過、マスコミ報道の動向などを検討した結果、この論争が、年表の字句の修正によって「正しい知識」が得られるとの予想に基づいており、一字一句見落とさずに読み込んで、その語句の理解がそのまま戦争観の形成に寄与しているはずという憶測のもとで、弾丸理論的なコミュニケーションの成立が前提とされていることが明らかとなった。そこには、本来のメッセージの受け手として想定されている一般来館者は存在せず、来館者の頭越しに“空中戦”が繰り広げられ、さらにこの“空中戦”には博物館の専門職員である学芸員が、学術的な立場で“参戦”できる余地がきわめて少なく、実質的に館の決定に従わざるを得ないという実態も浮き彫りになった。

(3) 戦争展示をめぐるコミュニケーションの課題と展望

埼玉県平和資料館の事例にとどまらず、戦争展示において、戦争展示のメッセージがどのように受容されるのかという課題については、本研究においてもっとも重視していたところであるが、ミュージアム・スタディーズにおける来館者研究やマス・コミュニケーション研究、メディア論などの動向を参照しつつ、具体的な事例に基づいて検討した結果、さまざまな政治的アクターが関わりながら決定された戦争展示においては、その論争の性格ゆえに、来館者の理解を前提としたコミュニケーションが想定されていない現状が

明らかになったとともに、戦争展示のメッセージの「宛先」や受け手の存在を想定したコミュニケーションを構築していくことの課題が確認された。

加えて、これまでの研究結果を踏まえ、今後の展望として以下のような知見を得た。第一に、メディア環境全体の中で、展示というメディアを相対化する視点を持つことである。すなわち、展示によっていかに来館者の歴史認識や戦争観を変えられるのかという、展示のメディアとしての効果は無条件に信奉するのではなく、展示というメディアの「限界」を認識することが必要とされ、そのためには、異種メディア間の競合関係や、一般の人々のメディアを横断した選択的接触の実態を含めた考察が求められる。第二に、戦争展示の来館者が一字一句漏らさずに理解し、展示内容がストレートに戦争観の形成に寄与するという単線的な展示理解を前提にするのではなく、誤読や無視・無関心といったネガティブな私的選好を視野に収めて展示コミュニケーションを構築していくことである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計7件)

- ①金子 淳、多摩ニュータウンにおける「伝統」と記憶の断層、日本都市社会学会年報、27号、2009、19-37
- ②金子 淳、戦後日本の博物館学の系譜に関する一考察、博物館学資料「鶴田文庫」の整理・保存及び公開に関する調査・研究解説編(科学研究費補助金基盤C研究成果報告書)、2010、58-63
- ③金子 淳、国立中央青年の家の成立とその政治的背景、静岡大学生涯学習教育研究、12号、2010、11-26
- ④金子 淳、公害展示という沈黙——四日市

公害の記憶とその表象をめぐって、静岡大学生涯学習教育研究、13号、2011、13-27

- ⑤金子 淳、多摩ニュータウンという暮らしの実験、国立歴史民俗博物館研究報告、査読有、171集、2011、83-106
- ⑥金子 淳、戦争観の形成と戦争展示——「熱い論争」と「冷ややかな無関心」という落差をめぐって、静岡大学生涯学習教育研究、14号、2012、13-24
- ⑦金子 淳、静岡の社会教育小史——思想・実践・政策面に関する動向を中心に、静岡大学生涯学習教育研究、14号、2012、25-34

〔図書〕(計1件)

- ①金子 淳、ニュータウンの成立と地域社会——多摩ニュータウンにおける「開発の受容」をめぐって、大門正克ほか編、大月書店、高度成長の時代2 過熱と揺らぎ、2011、119-153

6. 研究組織

(1) 研究代表者

金子 淳 (KANEKO, Atsushi)

静岡大学・生涯学習教育研究センター・准教授

研究者番号：00452178

(2) 研究分担者

該当なし

(3) 連携研究者

該当なし